

第248回 今月読んだ本  
福本和夫 思想の再解釈  
－「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ (1)

## まえがき

2026年は福本和夫(1894—1983)のデビュー作『社会の構成並に変革の過程』が刊行されてからちょうど100年目にあたる。

戦前の日本思想について読んだ人であれば、「福本イズム」という言葉を目にしたことがあるに違いない。福本イズムの内容がよくわからないままに記述が進み、いつの間にか舞台から退場してしまう。「福本イズムとは何か」という疑問には確たる答えが与えられずに、その問いすらいつの間にか忘れ去られていく。

このような読書体験をした人は多いのではないか。私もそのうちの一人である。

福本思想についての専門的な研究書は少ないながら存在する。著作集も刊行されている(初期著作集4巻+著作集10巻)。研究者が福本和夫を論じるとき、どうしても哲学や思想、政治についての細かい議論になり、福本について知りたいと思っている多くの読者は挫折してしまう。

本稿は「これを読めば福本の生涯と思想の概要がわかる」というコンセプトで書かれた「道しるべ」である。

複雑な議論は読み飛ばしても構わない。厳密な議論をより深く知りたいときは、本稿末尾の著書一覧、参考・引用文献などを参照していただきたい。

福本は89年の長い人生で、どのような生涯、思想的変遷を辿ったのだろうか。今日、ちょうど100年前の「福本イズム」を読む意味はあるのだろうか。

## 序章 「福本イズム」の描かれ方

「福本イズム」は、エリート主義的な福本思想に反発する叩き上げの労働運動家、北浦千太郎が命名した言葉である。反対派による批判・非難のための造語が一人歩きするのは珍しいことではない。モネの『印象・日の出』が酷評されて「印象派」という言葉が広まった例もある。

1920年代の中盤、日本の若者たちは福本和夫の思想に傾倒した。若者たちの中に熱狂的な支持者が一定数いたのは確かだが、

今では死語となりつつある「インテリゲンチヤ（知識階級）」の間で崇められていたに過ぎない。

当時、インテリ層はどれくらいの比率を占めていたのか。インテリ層とは何か。仮に高等教育を受けている者と定義してみよう。

文部科学省ホームページは面白い公式データの宝庫である。その中にヒントになる数値がある（中央教育審議会『我が国の高等教育の将来像（答申）』（補論2）我が国高等教育のこれまでの歩み（2004年）及び、「明治6年以降教育累計統計」）。

戦前の教育制度は、戦後の単線型教育制度と異なり複線型（スプーン型）であった。高等教育機関は1920（大正9）年時点で旧制大学（16校）、旧制専門学校（101校）、旧制高等学校（16校）、高等師範学校（4校）、師範学校（94校）など多様な校種に分岐していた。「進学率は、例えば、大正9（1920）年時点でこれらの高等教育機関合計で2.2%」であった。女子進学率の確たるデータは見つけられないが、その10分の1もあったかどうか。（比較対象としては適切ではないが、江戸時代の武士階級が全人口の約7%だったことを考えれば、2.2%というのはとても少ない。）

毎年5月1日現在のデータに基づく文部科学省「学校基本調査」では、令和7年度（速報値）の高等教育機関は大学（812校）、旧短期大学（292校）、高等専門学校（58校）、専門学校（2658校）であり、令和6年度の確定値で高等教育機関への進学率はなんと87.2%となっている。

ここで細かい数字を並べたのは、福本思想を受容した人たちが同世代のどのくらいを占めていたのか、そのイメージをあらかじめ肌感覚で掴んでおくことが必要だったからである。大正時代から昭和前期にかけて、「右」から「左」までさまざまな思想が離合集散を繰り返していた。戦前の日本思想史で語られる哲学や思想は、ごく一部の人たちの間で流通するに過ぎなかった。

こむずかしい統計の話はこのあたりで終わりにして、まずは2つの文学作品を例に挙げて、福本思想がどのように描かれているのか、を見ていこう。

小林多喜二（1903—1933）は高校国語の日本文学史で必ず教わるプロレタリア作家である。定期テスト対策に、「小林多喜二」イコール『蟹工船』、と覚えた人は数多くいるはずだ。特高（特別高等警察）の取り調べ中に拷問されて死亡したことも有名である。

秋田に生まれ、すぐに小樽に移住した多喜二が第2の故郷を舞台に幼少期から下積み時代までを描いた未完の自伝的小説に『転形期の人々』（1931—32）がある。主人公龍吉の商業学校時代の友

人である佐々木には東京の大学に通う友人がいた。その友人から佐々木宛に小包が送られてくる。開けてみると福本和夫の『社会の構成並に変革の過程』（1926）であった。

—今、東京ではこの本を読まない革命的学生・労働者なるものを考えることは出来ない。又この本の全面的な理解のために開かれないモロモロの研究会なるものを考えることは出来ない。云々。（中略）

その後、組合のものに会うと、福本のものを読んでいた。

「こいつを読まないで、没落の過、程、を、過、程、するんだってよ！」

と笑った。

「東京では女学生までが、福本の本を小脇に抱えているそうだよ！」

（『日本プロレタリア文学集・27 小林多喜二集（2）』新日本出版社、1988年、273—274頁）

「過程を過程する」は福本の独特の言い回しであり、この奇妙な表現に魅せられた若者は多かった。後に福本は道元『正法眼蔵』に「行持を行持せらるる」（「行持」とは仏道の修業を怠らずに続けること）という表現を見つけたという。

現在の視点から見ると、「女学生までが」という表現は不適切だ。「学生の誰もが」と読み替えることにしよう。

実際、福本の本はよく売れた。デビュー作『社会の構成並に変革の過程』（1926年2月刊）は初版から9ヶ月後には5版を重ねた。印税で経済的に余裕があった福本は、著名人が集まる東京本郷の高級下宿「菊富士ホテル」に逗留することになる。

私は、浅田彰の『構造と力』（1983年）が刊行されたときの一大ブームを思い出す。大学生協書籍部で平積みの本が飛ぶように売れ（哲学書で15万部!）、多くの学生が「小脇に抱えて」歩いていた。おそらく1960年代のサルトル・ブームもこうだったのだろう。『構造の力』が論じるドゥルーズらのポストモダン思想を理解できる学生はどれだけいたのだろうか。前期フッサール思想を発展させたサルトルの大著『存在と無』（全3巻）を読み通した人は購入者のごく一部ではなかったか。『存在と無』の代わりに講演録『実存主義は何か』を読んで実存主義をわかったつもりになっていた人が大半だったと思う。

『構造の力』や『存在と無』と比べると、『社会の構成並に変革の過程』ははるかに難しい。研究会を開いて講読しても全く歯が立たなかったことは容易に推測できる。自分の頭の悪さを悲観した

帝大生も多かったという。日本では論じられたことのない新しい考え方（西欧マルクス主義）が満載であったからだ。

小説家、詩人である中野重治（1902—1979）は東京帝国大学独文科の学生時代、福本が唱えるマルクス主義に魅了される。ここでは、中野の代表作の一つである自伝的小説『むらぎも』（1954）を取り上げよう。

金沢の旧制高校（第四高等学校、西田幾多郎、鈴木大拙らを輩出）から帝大に進んだ主人公の片口安吉は「新人会」に入会する。新人会とはいつの時代でもどこにでもありそうな名称の組織のように思えるが、戦前の思想を論じる上では特別の意味をもつ。

新人会は1918年に吉野作造東京帝大教授を顧問として創立された。当初は、人道主義的理想主義的社会主義の立場から啓蒙活動を行う団体として、学生だけでなく卒業生、学外の労働者も会員であった。活動家と理論家の対立が進む中、1921年に東京帝大の学内学生団体として改組、会員は学生のみとなる。全国の学生運動の指導的役割を果たし、日本共産党（第2次）が再建された1926年以降は実質的にはその下部組織となり1929年に解散する。

『むらぎも』では、新人会に加入してプロレタリア運動に関わっていき、やがて合同印刷争議の支援活動に従事する主人公安吉の精神的軌跡が丹念に描かれる。

小説の中の合同印刷争議のモデルは、1926年1月から2ヶ月にわたって続き、1000人以上の解雇者を出して労働者側が敗北した共同印刷株式会社（東京小石川）のストライキである。小説『太陽のない街』（1929）を書いた徳永直（1899—1958）はこの争議の中心にいた。日本プロレタリア文芸連盟（争議後に中野重治、亀井勝一郎らが加入）の橋浦泰雄は街頭でカンパして争議団を支援した。橋浦（1888—1979、鳥取県大岩村（現岩美町）出身）といえば、後に福本和夫と柳田國男（1875—1962）を結びつける人物である。

中野重治は東京帝大で福本の講演を聴いている。1925年の年末から翌年1月にかけての頃ではないか。『むらぎも』では、福本和夫は「岩崎義雄」、山川均は「山田氏」、雑誌『マルクス主義』は『マルクス主義研究』になっている。

安吉は岩崎義雄の講話をきいたときのことを思いだした。去年秋、新人会へ入りたてのころ、きょうは岩崎が講演にくるといのでふらふらと安吉はその教室へ聞きに行った。……安吉は、岩崎の書いたものを草色表紙の『マルクス主義研究』でしばらく前から読んでいた。それはなかなかおもしろかった。

「山田氏の方向転換論の方向転換より始めざるべからず」、  
「その後における結合はそれ以前における分離なくしてはあり得ず」というような題のつけ方が第一に彼におもしろかった。……考え方のスタイルもおもしろかった。安吉などよりも運動にずっと深入りしている連中が、岩崎の論文をしきりにバイブル扱いしている気持ちはよく呑みこめなかったが、書かれてある事柄よりも、その書かれ方が安吉にはあざやかな魅力だった。

三十五、六の色のくろい、口ひげを立てた縞ズボンの男がはいってきて方法論について話しはじめた。やはり安吉にはろくすっぽわからない。五、六十人も詰めかけているほかの学生にしても、安吉よりどの程度よくわかって聞いているのか安吉には怪しいとしか思えなかった。(中略)目の前の岩崎は、案外なほど素朴な調子の人だった。百姓風に素朴で、人見知りをするようなところでさえ安吉には好もしく受けとれる。

(講談社文芸文庫、1989年、149—150頁)

少し長い引用になった。400字詰め原稿用紙にして1枚半に満たない分量で、福本思想の受容のされ方、文体のユニークさ、講演の様子、福本の風貌などが実によく伝わってくる。中野の表現力はさすがとしか言いようがない。

雑誌『マルクス主義』は、福本が論文を寄稿し始めると発行部数が1000部から3000部へと急増したという。賀川豊彦、河上肇、幸田露伴、谷崎潤一郎、芥川龍之介らが寄稿した当時を代表する総合雑誌『改造』(1919—1955)の創刊部数が3万程度であったことを考えると、『マルクス主義』はよく売れたことがわかる。

「百姓風に素朴で」「人見知り」という表現には田舎者を馬鹿にするニュアンスがこめられることもあるが、中野重治=片口安吉は「好もしく」感じる。中野の出身地は福井県高棕村(現、坂井市丸岡町)、福本=岩崎は鳥取県下北条村の生れである。中野は福本に親近感を抱いたのではないか。

次に、思想の解説書において福本思想がどのように描かれているか、を見ていこう。耳慣れない専門用語や考え方が出てくるが、第1章以降で説明していくので、読み飛ばしていただいても構わない。

久野収と鶴見俊輔の共著『現代日本の思想—その五つの渦—』(岩波新書、1956年)は、敗(終)戦10年後の思想的「現在」から観念論(白権派)、唯物論(日本共産党の思想)、プラグマティズム

(生活綴り方運動)、超国家主義(昭和維新の思想)、実存主義(戦後の世相)を読み解くことによって、「時代を作る力」(211頁)を展望する好著である。21世紀が始まって四半世紀が経った現在、この本を読む人はほとんどいないだろう。丸山眞男が1957年から1959年にかけて発表した4つの論文を所収するロングセラー『日本の思想』(岩波新書、1961年、第IV章「「である」ことと「する」こと」は高校教科書の定番)とあわせ読むと、1950年代の思想状況がよくわかる。

昭和時代の日本共産党は、福本イズムにはじまる。

(『現代日本の思想』37頁)

1922(大正11)年に日本共産党は創立された。創立準備委員は山川均(1880—1958)、堺利彦(1871—1933)、近藤栄蔵(1883—1965)、荒畑寒村(1887—1981)、佐野学(1892—1953)らであり、サンディカルズム(労働組合主義)、アナーキズム(無政府主義)、老荘思想、庶民的常識などが混ざり合っ、共産主義といっても俗流唯物論と変わらないレベルであった(前掲37—38頁)。1923年の一斉弾圧の後、共産党設立は時期尚早だったという解党論が強まり、1924年に、第1次日本共産党は解散してしまう。

マルクス『資本論』(全3巻)の翻訳はなかなか進まなかった。1919年に生田長江(1882—1936、鳥取県貝原村(現日野町根雨)出身)が第1巻を翻訳するなどの動きはあったが、全3巻が高畠素之(1886—1928)によって完訳されたのは1924年である。当時、マルクスの原典を読むことができる者はほとんどいなかった。ヨーロッパの最新のマルクス主義理論を読み解き、日本語で語ってくれる学者の登場が切望されていた。

30歳の福本和夫はアメリカ(約1ヶ月)、イギリス(約1ヶ月)、ドイツ(約1年)、フランス(約1年)の2年半の留学を終え、1924年12月、新しい思想を希求していた論壇に颯爽とデビューする。

福本和夫の思想、いわゆる福本イズムは、大正期の日本共産党にあった不純な共産主義、その日本的折衷主義にたいする反撥であり、白紙状態で共産主義文献の勉強をはじめた新しい世代の知識人を、その文体の純粋性によって、とらえた。

(前掲38頁)

福本は、福本イズム以前の唯物論理解に弁証法を加える。

唯物論とは、精神、観念、心などの根源には物質があるという考え方で、反対語は観念論である。私たちの生活の根底は物質である、という当たり前のことを、なぜ、わざわざ論じなければならないのか。古代ギリシア以来、唯物論 vs. 観念論の論争は続いており、ここでは深入りしない。産業革命以降の社会や歴史は、生産力や生産関係といった物質的基盤によって動いている。そういう大雑把な理解で間違いはない。

弁証法とは、否定や矛盾の中に発展する推進力を見出していく哲学的手法である。否定や矛盾を原動力にする、というと難しく聞こえるが、物事は予定調和的に発展するはずはない、壁にぶつかりながら進んでいく、という真つ当な深い洞察である。弁証法もまた、古代ギリシア以来、さまざまな哲学者たちが論じてきた。資本主義社会の行く末を考察するために弁証法を導入したのがマルクスであった。

福本は、組織論において「結合のための分離」（分離結合論）、すなわち、いったん大衆から離れ、前衛政党として理論を鍛えた上で大衆政党と結合するプログラムを強力に推し進めようとする。理論がなければ組織は迷走を続けるだけである。少数の理論家たち（前衛）が方向性を示し、多数派（大衆）を導いていく。大衆から前衛へのフィードバックはほとんど想定されていない。

この組織論は……、現実にたいするたえざる働きかけの成功と失敗によって理論をきたえてゆくという契機をふくまず、十分に唯物論的な弁証法とはいえなかった。

だが、このような不十分さは、福本個人に帰せられるべきものではない。「福本」とは、昭和初期の日本共産党の傾向を代表する集合名詞である。(前掲42頁)

丸山眞男によれば、「近世合理主義の論理とキリスト教の良心と近代科学の実験操作の精神」が陰にも陽にも前提とされているマルクス主義が、受け入れの準備もなくいきなり一手に日本に移入されたことに「悲劇と不幸の因があった。……日本のマルクス主義がその重荷にたえかねて自家中毒をおこしたとしても、怪しむには足りないだろう。」（『日本の思想』第1章「日本の思想」57頁）

次の有名な一節は、「集合名詞としての『福本』」だけでなく日本思想全般に対する優れた論評として読むことができる。

従って、理論家の眼は、一方厳密な抽象の操作に注がれながら、他方自己の外辺に無限の曠野をなし、その涯は薄明の中に消え

てゆく現実に対するある断念と、操作の過程からこぼれ落ちてゆく素材に対するいとおしみがそこに絶えず伴っている。(中略)

ところが、実践(実感!)に対するコンプレックスの形であれ、あるいは理論の物神化であれ、理論が現実と同じ次元に立って競争するような知的風土では、さきのヘーゲル→マルクスの考え方はややもすれば次のような考え方を生む。すなわち一方、自己の依拠する理論的立場が本来現実をトータルに把握する、あるいは把握し得るものだということから責任の限定がなくなり、無限の現実に対する無限の責任の建て前は、実際には逆に自己の学説に対する理論的無責任となってあらわれ、しかも悪い場合にはそれがあいまいなヒューマニズム感情によって中和されて鋭く意識に上らないという始末に困ることになる。

(前掲60—61頁)

丸山独特のインテリゲンチャらしい回りくどい難解な表現である。丸山の言いたいことは単純である。

理論を立てる人間は、そこから漏れ落ちる無限の現実を決して忘れてはならない。それなのに、理論と現実、理論と実践、理論と実感を同一視しがちな日本の知的風土では、理論家たちは「こんなに頑張って理論を構築したのだから……」と言って、自らを免責してしまう。そこには、立ちほだかる現実の壁にはね返されながらも、それでもなお進んでいかなければならない実践家の苦勞や苦悩に対する深い共感はない。

ここで「理論」「学説」を「政策(立案)」、「理論家」を「政治家(官僚)」、「現実」を「私たちの生活」と読み替えれば、政治家(政治屋)や官僚に対する痛烈な皮肉ではないか、とさえ思える。マックス・ウェバーの『職業としての政治』(1919年)を持ち出すまでもなく、政策遂行者(政治家、官僚)は心情倫理ではなく責任倫理に従わなければならない。

福本は、理論が現実に対して優位に立つ、とは考えていない。日本の現実について深く学び、理論を鍛えようとして具体的な研究計画を立てていた。

福本は理論家である。理論と実践の両方でレベルの高いパフォーマンスを示す二刀流の思想家ではなかった。福本の不幸は、留学からの帰国直後に華々しくデビューしたために理論構築に十分な時間をかけられなかったこと(目の前の現実を理論に昇華させる時間的余裕がなかったこと)、日本の労働運動について知識も経験もないままに不得手な実践家の役割を果たさなければならなくなったこと、この2つにある。

一世を風靡した福本イズムは、コミンテルン（第3インターナショナル、共産主義インターナショナル、ソ連共産党による上意下達の機関）の「27テーゼ」（日本にかんするテーゼ、1927年）によって断罪され、2年半で失墜する。その後、福本は稀代の悪法である治安維持法を根拠に大阪で検挙され（3.15事件、1928年）、14年にわたる獄中生活を経て「日本ルネッサンス史論」の完成に精力を注ぐことになる。

福本和夫について語られるとき、「27テーゼ」あるいは3.15事件で終わることが多く、その後の人生や思想に言及されることはほとんどない。

福本が思想界に登場したのは31歳のとき、『日本ルネッサンス史論 総論編』の刊行が73歳のときである。

福本和夫とは何者か。「集合名詞」ではなく「個人としての『福本』」の89年を、ともに歩んでみよう。